

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

出版の現状

山岡洋一

- 統計にみる出版不況 - 爆走の先にあるものは
出版業界の代表的な統計をみていくと、出版不況はほんとうなのだと実感できる。出版点数の急増の先にあるものは何なのか、不安になってくる。

私的ミステリ通信(第2回)

仁木めぐみ

- ホームズとワトソンの原型
18世紀の文豪サミュエル・ジョンソンと伝記作者ジェームズ・ボズウェルが登場するシリーズ・ミステリを紹介。

誰も教えてくれなかった英語(第5回)

柴田耕太郎

- 英語の記号
何でこんな簡単な規則を学校では教えないのだろう。知らなくても英文を読むことは読めるが、もどかしさが残るはずだ。正しく理解することで訳文に明晰さが生まれる記号のルールをいくつか挙げる

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

統計にみる出版不況 - 爆走の先にあるものは

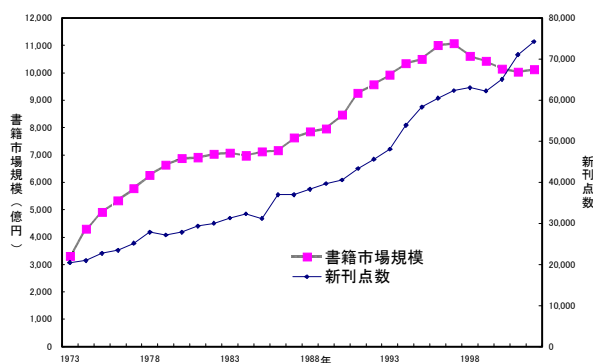
「嘘には3つの種類がある。嘘、真っ赤な嘘、統計だ」と言ったのはマーク・トウェインだったろうか。統計を示されたら、眉にたっぷり唾をつけて、だまされないようによくよく注意しなければいけない。だが、統計は現実を知るときの出発点でもある。出版業界の現状を知るための出発点として、統計を調べてみた。

出版のうち、書籍に関する統計では、小売店での実売総額を示す市場規模と、新刊点数の2つが代表的なものである。この2つの統計をみていくと、出版不況はほんとうなのだ実感できる。

市場規模は縮小傾向

まず、書籍の市場規模をみてみると、1997年まで拡大を続けてきたが、その後の5年間は縮小傾向にあることが分かる。2002年の市場規模は1兆123億円であり、ピークの1997年より10%近く縮小している。

もっとも、1兆32億円だった2001年とくらべると、2002年には市場規模がごくわずかながら拡大した。4年連続の縮小から小幅な拡大に転じたわけで、出版業界にとっては久しぶりの明るいニュースになった。ただし、これは『ハリー・ポッター』が爆発的に売れたためだとされ、出版業界全体にとって朗報といえるかどうかは疑問だ。この点については後に触れる。

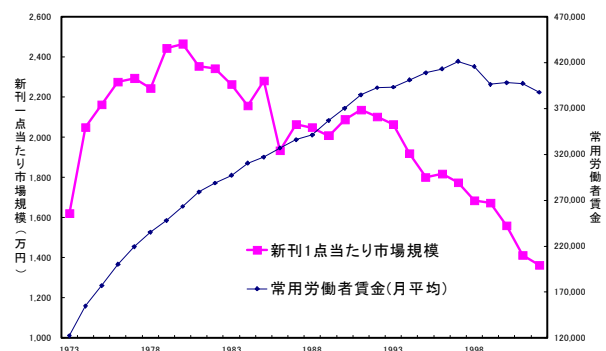


新刊点数は大幅増

つぎに、市場規模が縮小傾向をたどるなかで、新刊点数は逆に増加を続けている。1990年代末には頭打ちになるかともみられたが、2000年から2002年にかけてふたたび急激な増加傾向に戻った。2002年には7万4259点であり、前年より4.5%増加し、市場規模がピークになった1997年とくらべると19%も増加して

いる。15年前の1987年というバブル景気がはじまったころだが、当時の新刊点数は約3万7000点なので、その後に2倍になったことになる。30年前とくらべると3.6倍にもなった。

新刊点数の増加は、出版業界が元気な証拠ではない。苦しくなっている証拠だ。出版社は苦しくなると新刊点数を増やす。新刊をだして取次に納品すれば、売上がたち、収入が入ってくる。売れなければ何か月か後に返本になり、その分の代金を返却しなければならないが、少なくとも一時的には資金繰りが楽になる。だから、資金繰りが苦しくなった出版社は（つまり、倒産しかねない状況に追い込まれた出版社は）、融通手形代わりに新刊をだす。出版業界全体で新刊点数が増えているのは、いうならば、出版業界全体で経営が苦しくなっていることを示すものである。



新刊1点当たりの市場規模

市場規模が縮小傾向にあるなかで新刊点数が増えているのだから、新刊1点当たりの売上は大幅に落ちている。この点は、市場規模を新刊点数で割って新刊1点当たりの市場規模を算出すれば、ある程度まで確認できる。

新刊1点当たりの市場規模は1980年をピークに、その後20年以上にわたって、大幅に減少してきた。1993年には2064万円だったが、2002年が1363万円だから、過去10年に34%も減っている。ピークの1980年は2465万円であり、過去22年では45%の減少だ。後に触れるように、出版は固定費の比率が高く、変動費の比率が低いので、1点当たりの部数と売上が増えると、利益率が急激に高まる。逆に、1点当たりの部数と売上が減ると、利益率が急激に下がり、赤字

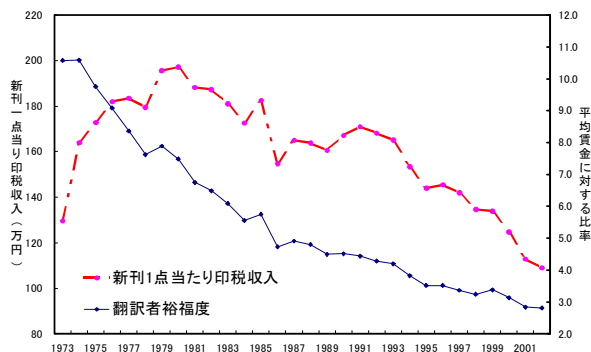
にすらなる。だから、新刊1点当たりの市場規模の減少は、出版業界にとってきわめて頭の痛い問題であるはずだ。

それだけではない。じつのところ、市場規模と新刊点数は性格が違うので、新刊1点当たりの市場規模には何の意味もないという考え方も成り立つ。書店で売られているのは新刊本だけではない。古いものでは50年前に出版された本がいまでも売られている。市場規模は、小売店での新刊本の売上と既刊本の売上を合計したものなのだ。そして、これも後に触れるが、出版社にとってドル箱になるのは新刊本ではなく既刊本である。だが、新刊本と既刊本（たとえば発売から1年以上を経過した本）に分けて市場規模を示す統計はないようだ。そのため、無理を承知のうえで市場規模を新刊点数で割る方法を使っている。既刊本分を除けば、新刊1点当たりの平均売上はもっと少ない。

ところが、ここ数年、既刊本の比率が急速に落ちてきたという話をよく聞く。以前なら、年に何回か書店で既刊本のフェアを開催し、それに向けて定番の本を増刷するのが通例だったが、いまではそういうことがめっきり減っているという。その一因は新刊本の氾濫にあるともいう。新刊本が多くなりすぎて、どの書店でも売り場の余裕がなくなっているというのだ。土日や祭日、盆暮も含めて、1年365日の1日当たりにして200点もの新刊がでていいるのだから、どんな大型店舗でも一杯になるのは当然である。

出版社は苦しいから新刊を増やす。新刊を増やすから書店は余裕を失い、商品を長く陳列しておくことも、定番の既刊本を売ることもできなくなってきた。出版社は既刊本に頼っているわけにはいかないから、新刊を増やすしかない。これを悪循環という。出版業界は典型的な悪循環に陥っているのだ。

出版翻訳者の裕福度



出版翻訳者は通常、印税収入によって経費を賄い、生活を支えている。印税収入は定価×刷り部数×印税

率で決まる。このうち定価×刷り部数は、1点当たりの売上÷(1-返本率)であり、返本率が一定であれば1点当たりの売上に比例する。

これが訳書1点当たりの収入であり、年間の収入は大雑把に言えば、これに年間の翻訳点数をかけた金額になる。もちろん、訳書は1点ずつ定価も刷り部数も違うし、前年までに出版された訳書の増刷があれば、その分の印税収入が加わる。だが、前述のように、既刊本の売れ行きは落ちているので、増刷分の印税はほとんど見込めない場合が多くなってきた。

もうひとつ、印税率は10年ほど前には8%が常識だったが、出版不況が長引くとともに、出版社が引き下げを求める動きがでてきている。7%になれば、出版翻訳者の収入は12.5%減る。6%になれば25%減る。なかに4%という出版社もあるので、出版翻訳者の収入が半分になっている場合もある。

出版社の場合には、苦しくなれば新刊点数を増やす方法がとれるが、翻訳者の場合には年間の翻訳量をそれほど増やすことはできない。ふつうは年に3点から4点が限度であり、よほど翻訳が速い人でも6点というのはかなり無理がある。そのうえ、新刊1点当たりの市場規模が減少傾向をたどっているのだから、出版翻訳者の生活が楽になっているはずがない。この点をきわめて大雑把な形でではあるが、検討してみた。

市場規模の統計は新刊本と既刊本に分かれてはいないし、翻訳書だけの統計もない。そこで、新刊1点当たり市場規模に標準的な印税率である8%をかけて、新刊1点当たり印税収入を求めた。新刊1点当たり市場規模は1980年の2465万円から2002年の1363万円まで減少を続けているので、当然ながら、新刊1点当たり印税収入も減少を続けている。1980年には197万円だったが、2002年にはわずか109万円になった。実際には、返本率がほぼ40%なので、その分を考慮しなければならないが、出版翻訳者の場合には収入から経費を差し引いたものが所得になる。返本分は経費にあてられると想定した。

収入だけを見ても、翻訳者の生活がどこまで豊かなのかはわからない。そこで、労働厚生省が発表する平均賃金（全産業常用労働者、月平均現金給与総額）で何か月分にあたるのかを調べた。平均賃金は1973年の12万円強から1997年の42万円強まで上がり続け、その後は不況の影響で若干下がっている。2002年には39万円弱であった。図と表の翻訳者裕福度は、新

出版業界の長期低落

年	書籍市場規模	新刊点数	新刊1点 当たり 市場規 模	新刊1点 当たり 翻訳印 税	常用労働 者賃金(月 平均)	翻訳者 裕福度
	(億円)	(点)	(万円)	(万円)	(円)	(月)
	(A)	(B)	(A/B)	(C)	(D)	(C/D)
1973	3,312	20,446	1,620	129.6	122,545	10.6
1974	4,293	20,940	2,050	164.0	154,967	10.6
1975	4,912	22,727	2,161	172.9	177,213	9.8
1976	5,336	23,464	2,274	181.9	200,242	9.1
1977	5,769	25,148	2,294	183.5	219,620	8.4
1978	6,259	27,906	2,243	179.4	235,378	7.6
1979	6,643	27,177	2,444	195.5	247,909	7.9
1980	6,874	27,890	2,465	197.2	263,386	7.5
1981	6,909	29,362	2,353	188.2	279,096	6.7
1982	7,031	30,034	2,341	187.3	288,738	6.5
1983	7,080	31,297	2,262	181.0	297,269	6.1
1984	6,979	32,357	2,157	172.5	310,463	5.6
1985	7,123	31,221	2,281	182.5	317,091	5.8
1986	7,157	37,016	1,933	154.7	327,041	4.7
1987	7,636	37,010	2,063	165.1	335,944	4.9
1988	7,843	38,297	2,048	163.8	341,160	4.8
1989	7,969	39,698	2,007	160.6	357,079	4.5
1990	8,474	40,576	2,088	167.1	370,169	4.5
1991	9,264	43,345	2,137	171.0	384,787	4.4
1992	9,580	45,595	2,101	168.1	392,608	4.3
1993	9,917	48,053	2,064	165.1	393,224	4.2
1994	10,340	53,890	1,919	153.5	401,128	3.8
1995	10,498	58,310	1,800	144.0	408,864	3.5
1996	10,996	60,462	1,819	145.5	413,096	3.5
1997	11,062	62,336	1,775	142.0	421,384	3.4
1998	10,610	63,023	1,684	134.7	415,675	3.2
1999	10,421	62,261	1,674	133.9	396,291	3.4
2000	10,152	65,065	1,560	124.8	398,069	3.1
2001	10,032	71,073	1,412	112.9	397,366	2.8
2002	10,123	74,259	1,363	109.1	387,638	2.8

資料 出版年鑑各年版(出版ニュース社)

労働厚生省毎月勤労調査、月平均現金給与総額、
全産業常用労働者、30人以上の事業所

注 新刊1点当たり印税収入 = 新刊1点当たり市場規模 × 8%
翻訳者裕福度 = 新刊1点当たり印税収入 ÷ 平均賃金

刊1点当たり印税収入を平均賃金で割って求めた。30年前には、1点の翻訳で平均賃金の10か月分以上の収入があったが、いまでは3か月分に満たないことが分かる。3か月間という、通常、本1点を訳すのに要する最低の期間なので、翻訳者の収入は平均賃金を割り込んでいることになる。ただしこれは印税率を8%としたときのものなので、たとえば6%であれば、2か月分にすぎなくなる。

ハリリー・ポッター現象

前述のように、2002年には5年ぶりに出版の市場規模が微増に転じた。これは『ハリリー・ポッター』の第4巻が発行され、第1~第4巻がベストセラー・リストの上位を独占したことによるものだといわれている。いわゆるハリリー・ポッター現象だが、これが翻訳出版に与えた影響を検討しておきたい。

『ハリリー・ポッター』の第4巻は、初刷と増刷を合わせて360万部が発行されたという。定価が3800円なので、これだけで140億円近い大型の商品になった。

書籍の市場規模は前述のように1兆円強なので、これだけで1%を超えている。出版社の正味が70%だとすると(実際の比率は出版社によって違うので、よく分からないが)、これ1点で100億円弱になる。書籍部門の売上が100億円を超える出版社はそう多くはないとみられる点からも、規模の大きさが分かる。

そして、第4巻では買い切り制をとったことも、大きな話題になった。書籍は通常、委託販売であり、書店は売れ残った本を返品できる。これは、書籍が独占禁止法の例外を認められて、再販売価格(つまり小売店が販売するときの価格)を出版社が決められるようになっていることと関連している。書店は売れ残ったときに安く売るわけにいかないのだから、返本ができなければ、経営が成り立たなくなる。だから、返本が可能なのは、再版価格を維持する以上、当然なのだ。

ところが、『ハリリー・ポッター』の第4巻は買い切り制であった。第3巻までは発売日に配本が少なく、みすみす売りのがしてしまうという苦情が中小の書店から寄せられていた。そこで第4巻では注文の冊数をかならず配本する見返りとして、買い切り制をとり、返本を認めないことにしたのだという。

常識的に考えると、その場合、2つの条件がなければならぬはずだ。第1に、売れ残りのリスクを書店が負うので、書店のマーゲインが通常より高くなければならぬ。第2に、売れ残ったときには安く売れないので、再版価格維持はできない。この2つの条件が満たされてはじめて、買い切り制が成り立つはずだ。

ところが実際には、書店のマーゲインは同じようだし、再版価格も維持されている。そして一説によると、書店の売れ残り在庫が合計100万部にのぼるとい(30万部程度だという説もある)。売れ残りが大量にあっても、版元の側では返本の山になる心配がないので、追加の広告をうつ必要もないし、販促イベントを計画する理由もない。第5巻の発売が映画公開のときにまたブームになって売れるので、倉庫に積んでおいて下さいという態度をとっていただければいい。苦しいのは書店だ。再版価格維持協定があるので、在庫処分の安売りもできない。

『ハリリー・ポッター』のような話題の商品なら、思い切った方法をとって、旧態依然とした書籍流通に新風を吹き込めたかもしれない。買い切り制によって売れ残りのリスクを負う見返りに書店が何をえたのかはよく分からないが、注文の冊数をかならず配本してもら

えることだけだったとすれば、新風どころか、悪しき先例を残したただけだというべきかもしれない。

素人博打の誘惑

馬券にしる宝くじにしる、賭博にはほとんど縁がないという、真面目を絵に描いたような人間なのだろうと思われかねないが、そうではない。出版翻訳は博打なのだ。1冊の本を訳す手間と苦労は変わらなくても、刷り部数が3000部の場合もあれば、300万部の場合もあるのが出版翻訳だ。博打を生業としているのだから、遊ぶときに賭をすることはない。

そういうわけで詳しいことは何も知らないが、玄人筋が馬券を買うときは、当たれば万馬券も珍しくない三連複などには目もくれず、配当が少ないが手堅い複勝式を買うのだそう。配当が110円とか130円とかになることが多い馬券を買ってなにが面白いのだろうと考えるのは、どうやら素人のようだ。出版翻訳も同じで、大ヒットを狙わず、手堅い本を訳していかなければ、生活は成り立たない。

だが、いわゆるハリー・ポッター現象によって、そしてチーズや金持ち父さんのヒットによって、出版翻訳がオッズの高い賭になってきたのではないかとも思える。そうなっていれば、不幸なことである。

出版社も、大ヒット狙いになりやすい。出版事業にはもともと、配当率の高い賭になりやすい性格がある。経営の言葉を使うと、出版事業は営業レバレッジ（槓率効果）が高い。出版事業は多品種少量生産だ。たとえば定価2000円、初版5000部の本を作ると、定価ベースの総額はわずか1000万円だ。出版社にとっては、700万円前後の商品でしかない。普通、コストはその80%前後というから、500万円ほどだ。これだけで新刊1点ができる。

そして、コストの大部分は固定費だ。編集に要するコスト、印刷費のうち製版組版代などは部数に関係なく一定だ。刷り部数に比例して増える変動費は、用紙代、製本代、印税ぐらいしかない。増刷するとき、固定費は負担する必要がなく、変動費だけを負担すればよくなる。したがって、その分の利益率は高い。槓〔てこ〕の作用のように利益が増えていくので、槓率効果という。槓率効果が高く、部数が増えれば急激に利益率が高くなるのが出版事業の性格なのだ。たとえば定価2000円、初版5000部の本が100万部の大ヒットになるとどうなるか。定価ベースで20億円、出版社の売上は14億円前後だ。当初のコストは500万円

強にすぎず、しかも固定費が多い。変動費を多めに見積もっても、万馬券なみに儲かる計算になる。

この性格から、出版事業は下手な鉄砲も数うちや当たる式に陥りやすいといえる。そして、ハリー・ポッターや、チーズ、金持ち父さんの大成功を見せつけられれば、複勝式はやめて三連複を買おうという気持ちになっても不思議ではない。だが、玄人筋が手堅く儲けている一方で、素人さんがオケラになるのが賭博のつねだ。出版業界が、そして出版翻訳者がオケラ街道をとぼとぼと歩く事態にならなければいいのだが。

出版翻訳者にとって一番ありがたいのは、既刊本を着実に売ってくれることだ。過去の仕事で印税が入ってくるからだ。出版社にとっても、既刊本は大ヒット以上に利益率が高い。大ヒットの場合、巨額の広告費をかけるうえ、どうしても売れ残りの返本が多くなる。既刊本の定番なら、返本率は事実上ゼロになるし、広告費も不要だ。だから既刊本を着実に売っているかぎり、出版社は安泰だ。だが最近では前述のように、大量の新刊本に押されて、既刊本が売れなくなってきているという。既刊本を売る工夫をしなければ、出版社は苦しくなり、出版翻訳者をもっと苦しくなる。

大ヒット狙いの陥穽

ハリー・ポッターやチーズのような大ヒットを狙って下手な鉄砲を撃ちまくることに、じつはもうひとつ大きな危険がある。翻訳する本、出版する本の性格、標的とする読者層が偏っていく危険である。

100万部を越える大ヒットになるには、普段はあまり本を買わない層が買ってくれなければならない。年に数冊程度しか本を買わない層が買ってくれなければ、100万部を越えるはずがないのだ。そこで、最近増えているのは、本を読まない層に向けた本である。読みやすく分かりやすい本、といえは聞こえがいいが、要するに中身のない薄っぺらな本が増えている。

だが、読者はそんな本を求めているのだろうか。時間をかけて努力するのを嫌う風潮、嫌うどころか馬鹿にする風潮は、日本では10年以上前のバブルの時代に、アメリカでもつい最近のバブルの時代に顕著になった。書店に行くと、浮かれ騒ぎのバブルの時代に戻ったのではないかと思えるような本がやたらに多い。いまの読者はそんなに浮ついていないと思う。もっと着実だし真面目だし真剣だと思える。読みやすく分かりやすいと銘打った本など、いまの時代風潮には合わないと思うのは、感覚が鈍いせいなのだろうか。

ホームズとワトソンの原型

突然ですが、ホームズとワトソン、どちらがお好きですか？ コナン・ドイルのあまりにも有名な名探偵、シャーロック・ホームズは芸術家肌で推理の天才、でもちょっと偏屈で孤高の人。みかけはきゃしゃで色白で眼光が鋭く、意外に優しい一面や武術の達人振りを時々かいま見せてくれる少し謎めいた男性です。そしてその友人で伝記作者、助手的な役割もつとめるジョン・H・ワトソンは、常識的で人懐こい性格。開業医ですが、軍医としてアフガニスタンに渡り、敵と渡りあって負傷したという勇ましい過去も持っています。ホームズの天才を尊敬し、同時にその危うさを心配しながら見守っている、友情にあつい優しい男性です。

後のミステリの方向性を決定づけたこのゴールデン・コンビには、いずれ劣らぬ魅力があり、どちらが欠けても作品の魅力が半減してしまうと思います(その証拠に『シャーロック・ホームズの事件簿』の中のワトソンが登場せずホームズが語り手となっている短編「獅子の鬣〔たてがみ〕」はいつもの精彩を欠いている気がします)。長編『四つの署名』『パスカーヴィル家の犬』では、本筋の事件の謎への興味とあわせてワトソンの冒険やロマンスが彩りを添え、長い物語の最後まで読者を引っ張っていく引力になっています。

この二人の組み合わせがいかに不滅であるかはみなさんもよくご存知のことでしょう。ホームズが誕生してから100年以上経つ現在、ホームズの国イギリスからみたら東洋の異国である日本のミステリ界でさえ、あたりまえのように事件を解決する探偵のことを「ホームズ役」、その助手のような立場にあたる(語り手であることが多い)人物を「ワトソン役」と呼んでいるぐらいですから。

私事で恐縮ですが、冒頭の問い、実は私は(少数派なのかもしれませんが)「ワトソン派」です。女性として見ると、ミステリアスな天才ホームズにももちろん魅力はあるのですが、優しく意外に男らしいワトソンの方によりひかれる気がします。ワトソンが後の妻、メアリーに出会って恋に落ち、結婚することになる『四つの署名』を初めて読んだ時には、二人の恋の行方にドキドキしたものです。

前置きが長くなってしまいましたが、今回はホームズよりも一世紀以上前の18世紀のイギリスに、ホームズとワトソンの原型のような二人組がいた、というお話です。コナン・ドイルは、自分の恩師ベル博士をモデルにシャーロック・ホームズ像を創り上げたという話は有名ですが、ホームズとワトソンのコンビネーションにはもう一つ別のお手本がありました。偉大な孤高の天才といつも行動をともにする忠実な伝記作者という組み合わせは、文豪サミュエル・ジョンソンと、その伝記『サミュエル・ジョンソン伝』を書いたジェームズ・ボズウェルの二人にそっくりなのです。

まず、サミュエル・ジョンソンとはどんな人物かということをご説明しましょう。史上初の体系的な英語辞典『英語辞典』をたった一人で執筆したことが有名ですが、他にシェークスピアの全作品の注釈、ポーブやドライデンなどのイギリス古典詩人の列伝である『詩人伝』など、イギリス文学史に燦然とかがやく業績を数多く持つ偉人です。

『英語辞典』にはユニークな定義も多いのですが、自らを皮肉ったユーモラスな例をひとつご紹介しましょう。

lexicographer (辞書編纂者) :

A writer of dictionaries; a harmless drudge, that busies himself in tracing the original, and detailing the signification of words.

辞書を書く人。語源をさぐり、細かく語意を定義するなどせっせと骨折り仕事をする何の害もない人物。

また、談話の達人でもあり、When a man is tired of London, he is tired of life; (ロンドンに飽きたものは人生に飽きたのだ) など、いまだに引用され続けている言葉をたくさん残しています。

そして、この発言のほとんどは彼を崇拜し、可能な限りジョンソンと行動を共にし、その発言を毎日日記に書き留めていた文学好きの弁護士ジェームズ・ボズウェルが、ジョンソンの死後発表した『サミュエル・ジョンソン伝』という伝記の中で紹介したものです。

『ジョンソン伝』にジョンソンの毎日の行動がこと細かに報告されているおかげで、ジョンソンは歴史上でもまれなほど、その性格や素顔が詳しく知られている

人物なのです。大柄で食欲旺盛、大声で話し、寸鉄人を刺す皮肉を得意とする豪快な人物ですが、一人暮らしが長く、寂しがり屋で動物や弱い人々に優しく、繊細な性格の持ち主でもありました。またうつ病に悩まされていたなど、ホームズを思わせる面もあります。

一方、ジョンソンのことを語る中で自然と浮かび上がってくるボズウェル自身の性格は、単純で見栄っ張り、女好きで、少し常軌を逸するほどの記録魔……といったところでしょうか。こちらはワトソンほど魅力的な人物ではないかもしれません。

イギリス文学史上では「ジョンソンの時代」(Age of Johnson)と呼ばれることもある 18 世紀は、同時に「理性の時代」(Age of Reasons)でもあり、科学への意識がめばえはじめた時代でした。知的探究心が強く理性的な心を持っていたジョンソンは、さまざまな不思議な事柄(たとえば心霊現象など)に興味を持ち、なんとか科学的な説明ができないかと頭をひねることもありました。こう書くと、ホームズが 19 世紀後半の最先端の科学に興味を持ち、フラスコから煙が出るような実験をしていたのを思い出しませんか？

ボズウェルの『ジョンソン伝』は英米人にはおなじみの本で、英語には Boswellize、つまり“ボズウェルする”という動詞があるくらいです。意味は誰かの横にくっついていて、その発言を逐一書きとめるということです。まさに「伝記作者」、つまり「ワトソン役」ですね。ドイルはホームズものの最初の短編「ボヘミアの醜聞」(『シャーロック・ホームズの冒険』に収録)の中でホームズに、「伝記作者がそばにいてくれないと、張りあいがないからね」(延原謙訳)と仰せていますが、この原文は I'm lost without my Boswell です。ドイルの頭の中でワトソンは「ボズウェル役」であると位置づけられていたと言えます。

そしてこの二人を主人公にした歴史ミステリが今回ご紹介する [リリアン・デ・ラ・トーレ](#) の探偵サム・ジョンソン・シリーズです。

歴史上の人物を探偵役にすえたミステリといえば、現在活躍している作家のものでも、パーティー殿下ことエドワード七世が主人公のピーター・ラヴゼイの「殿下シリーズ」(『殿下と七つの死体』『殿下とパリの美女』〔ともに中村保男訳、ハヤカワミステリ文庫〕など)、若き日のルーズヴェルト大統領が事件を解決するウィリアム・L・デアンドリアの『ピンク・エンジェル』(真鍋義博訳、ハヤカワミステリ文庫)

を始めとして多数あります。1940 年代にスタートしたサム・ジョンソン・シリーズは、今ではすっかり定着しているこの形式のミステリの元祖だと言われているのです。

リリアン・デ・ラ・トーレ(1902~1994)はコロンビア大学などで 18 世紀、19 世紀の歴史を専攻してきた女性で、小説を書き始めたのは 40 歳を過ぎてからだそうです。そして 18 世紀イギリス文学の専門家である夫とのある会話の中で「サム・ジョンソン・シリーズ」の着想を得たといいます。どんな会話だったのか、85 年に出た三冊目の短編集 The Return of Dr. Sam: Johnson, Detector の序文を引用してみましょう。

「名探偵なんて、くだらん！」と夫は鼻を鳴らしました。「もったいぶった好事家や、可愛い花嫁や、気取った中国人や、ご立派な老婦人が……次は、そうだな、警察犬なんかどうだ！」
「警察犬の話ならもうあるわ」と私は認めました。
「確かに、うすっぺらな探偵の小説は薄っぺらだわ。でも多面的でしっかりとした人間性を備えた探偵がいたら、たとえば、えーと、あのボズウェルの伝記の中のサム・ジョンソン博士みたいな……」

この最後の言葉を口に出したとたんに、デ・ラ・トーレは、ジョンソンがミステリの探偵役にぴったりだということに気づきます。架空の探偵たちの誰にも負けないほど個性的で多才で人間的で、好奇心に富み、不屈の勇気と鋭い知性を持ち、科学的にも関心を持っている……しかももともとジョンソンには本物の元祖伝記作者、これ以上ないほど立派な「ワトソン役」までついているじゃないの！、と。

こうしてこれ以上ないほどぴったりの「ホームズ役」と「ワトソン役」を発見したデ・ラ・トーレは、その豊富な知識を活用し、猥雑で活気に満ちた 18 世紀ロンドンを舞台に、ジョンソンとボズウェルが数々の謎を解決する痛快なミステリを書いたのです。

デ・ラ・トーレはサム・ジョンソン・シリーズのほかに『消えたエリザベス』(平井呈一訳、東京創元社世界推理小説全集 65)や Heir of Douglas (1952) などの長編も書いていますが、このサム・ジョンソン・シリーズも含めて、彼女の著作はみな、歴史上実際にあった事件をもとに想像をふくらませ、ディテールや解決を創作したものになっています。

サム・ジョンソン・シリーズは短編ばかり 32 篇で、4 冊にまとめられています (Dr. Sam: Johnson, Detector [1946] The Detection of Dr. Sam: Johnson [1960] The

Return of Dr. Sam: Johnson, Detector [1985] The Exploits of Dr. Sam: Johnson, Detector [1987])。最初の作品を書き上げたデ・ラ・トーレは原稿を「エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン」誌に送り、それがエラリー・クイーンズの片割れフレデリック・ダネイの目にとまって世に出る運びとなりました。ダネイは探偵サム・ジョンソンをとて気に入り、もっと書くようにデ・ラ・トーレをうながし続けていたそうです。

それぞれの短編には必ず作者のライナー・ノートとでもいうような解説が添えられています。これはボズウェルの文体を真似た本文とは雰囲気の違い、読みやすく親しみやすい文体で、作品の元となった事件のことや歴史的背景などをわかりやすく説明しており、私は読後のちょっとしたおまけとして楽しんでいました。

日本では残念ながらサム・ジョンソン・シリーズの本は一冊の形では出ていませんが、アンソロジーの中や雑誌などでは何篇か紹介されています。本物そっくりの蠟人形の作り方を書いた不気味な雰囲気の「蠟人形の死体」(深町真理子訳、『クイーンズの定員』〔光文社文庫〕に収録)、ダイヤモンドの盗難と暗号の謎を解明する「盗まれたクリスマス・プレゼント」(吉田誠一訳、『暗号ミステリ傑作選』〔創元推理文庫〕に収録)、発見されたばかりのシェイクスピアの未発表原稿が盗まれる「消えたシェイクスピア原稿の謎」(森慎一訳、『ミステリマガジン』81年6月号に掲載)などを始めとして、12篇の短編が邦訳されています。上に挙げた「蠟人形の死体」と「盗まれたクリスマス・プレゼント」、他に「重婚夫人」(佐宗鈴夫訳、『クイーンズ・コレクション 2』〔ハヤカワミステリ文庫〕収録)は現在簡単に入手できまので、ご一読をおすすめします。

サム・ジョンソン・シリーズの魅力は何といってもジョンソン博士とボズウェルのキャラクターの楽しさです。頭脳明晰で、ユーモアと正義を愛するジョンソンの人となり、おとぼけボズウェルとのやりとりの中でいきいきと再現されています。またボズウェルが語り手であるという設定なので、文体も本家『ジョンソン伝』に似せてあります。さらに時々、『ジョンソン伝』から実際の場面を借りてきて、物語の中にさしはさむこともあります。

たとえば The Return of Dr. Sam: Johnson, Detector に収録されている Murder Lock'd In という短編では、ジョンソンとボズウェルの初対面の場面が描かれているのですが、これはほぼそっくり『ジョンソン伝』そ

のままです。高名な文豪ジョンソンにようやく出会える喜びと緊張で堅くなっていたボズウェルが、憧れの偉人に皮肉を言われ、うれしいようながっかりするような、複雑な心境になるユーモラスな場面です。

この短編では 18 世紀に実際に起こった密室殺人事件の謎が「解明」されています。作者のノートによると、1773 年に行われた実際の裁判では、法廷にドアを持ち込み、密室トリックを実演してみせたようです。ジョンソンとボズウェルが、あの黄金期の密室ミステリの古典、ディクソン・カーの『三つの棺』(三田村裕訳、ハヤカワミステリ文庫)さながらに密室談義を繰り広げる場面もあります。デ・ラ・トーレはカーが大好きで、カーの『エドモンド・ゴドフリー卿殺害事件』(岡照雄訳、国書刊行会)を読んで、ミステリを書き始めたぐらいですから、もちろん十分『三つの棺』を意識していたのでしょう。ミステリ・ファンにとっては「おいしい」短編です。

第一短編集 Dr. Sam: Johnson, Detector の中の Flying Highwayman は、一本道から忽然と姿を消してしまう“空飛ぶ追いはぎ”の謎を解くミステリですが、これもまたミステリ・ファンを喜ばせてくれる作品です。なぜかという、この作品にはジョンソン、ボズウェルのほかに、盲目の判事サー・ジョン・フィールディングというゲストが登場するからです。

このジョン・フィールディングという人は、ジョンソンと同時代のロンドンに実在した人物で、あの『トム・ジョーンズ』を書いたヘンリー・フィールディングの弟です。ジョン・フィールディングは早逝したヘンリーから引き継いだ、スコットランド・ヤードの前身となる警察組織“ボウ街の捕り手”(Bow Street Runners)を指揮していました。その明晰な頭脳で数々の名裁きをし、ロンドンの悪党どもを震えあがらせていた名判事なのです。

そして(ミステリ・ファンにとってはここからが大事なところなのですが)、このジョン・フィールディングはブルース・アリグザンダーが現在次々と発表しているミステリ、ジョン・フィールディング・シリーズの中で探偵役でもあります。94年に始まったこのシリーズ、原書のほうはもう第9作まで進んでいて、今年の10月には第10作目が出るようです。邦訳は『グッド・ホープ邸の殺人』『クラブ街の殺人』(ともに近藤麻里子訳、ハヤカワポケットミステリ)の二冊で、原書の持つクラシカルな雰囲気を伝えながらも

読みやすい訳文です。次の翻訳が待たれるところです。

アリグザンダーはある作家のペン・ネームであることしかプロフィールが明かされていない覆面作家です。名前は「ブルース」ですが、私は漠然と女性なのではないかと思っています。真相はどうなのでしょう？

ジョン・フィールディング・シリーズはロンドン近郊のリッチフィールド（ジョンソンの故郷でもあります）出身の天涯孤独の少年ジェレミーの筆によって語られるミステリで、18世紀ロンドンの庶民の暮らしを生き生きと伝え、毎回スリルと謎解きを十分に楽しませてくれます。判事との心温まるエピソードもあり、ジェレミー少年の成長の物語として読むこともできるシリーズです。

さらに、このジョン・フィールディング・シリーズにはなんと、ジョンソンとボズウェルが揃ってゲスト出演しているのです。

デ・ラ・トーレとアリグザンダーという、二人のミステリ作家が約50年の時をはさんで書いたそれぞれのミステリでそろって共演している18世紀の三人の人物たちの、微妙なキャラクターの違いを読み比べてみるのも一興でしょう。基本的には二人の作家の意見は一致しているようで、デ・ラ・トーレのFlying Highwaymanではゲストのフィールディング判事はカッコいいところを見せ、ジョンソンも頭脳の冴えを發揮していますし、アリグザンダーの方でも、フィールディング判事が縦横無尽の活躍をしているのももちろんですが、ゲストのジョンソンもまた分別のある賢人として描かれ（少しとっつきづらいというイメージはありますが）、重要な役どころを果たしています。

ただ、かわいそうなのはボズウェルです。デ・ラ・トーレの方では早とちりで、いつも女性に色目をつかってばかりいる（しかしなかなかモテモテでもある）ものの、憎めない人物です。しかしゲスト出演したアリグザンダーの作品の中では、フィールディング判事には「……うぬぼれの強い道楽者だよ。自分では弁護士と言っているがな。やつはジョンソンの下に足繁く通い、いまでは小判鮫さながらに貼りついている。……」（『グッドホープ邸の殺人』）と言われてしまうし、語り手のジェレミー少年にまですっかり嫌われていて、「めかしこんだうぬぼれ屋？ それはまったくそのとおりだが、加えるに、小賢しい口達者とも言えるだろう」（『グッドホープ邸の殺人』）と書かれてしまい、散々な扱いです。

サム・ジョンソン・シリーズに話を戻すと、短編集には収録されていない「大博士と猫」（宮脇孝雄訳、「EQ」92年1月号掲載）は短いながらも微笑ましいお話です。最後の短編集The Exploits of Dr. Sam: Johnson, Detectorが出た89年以降に書かれたらしい、デ・ラ・トーレ晩年の作品ですが、この作品の中ではジョンソン博士が飼っていた実在の猫、ホッジが活躍します。ここでもまた『ジョンソン伝』のエピソードがうまく使われています。ジョンソンがホッジの前で、以前飼っていた別の猫のことをほめてしまってからあわてて取り繕うように「でも（ホッジは）とてもいい猫だよ、本当に」という有名な場面が折り込まれているのです（余談ですが、ロンドンにあるジョンソンの博物館では、このジョンソンの台詞とホッジの絵がプリントされたしおりを売っていました）。冒頭でジョンソン大博士の手から生牡蠣を食べていたホッジは、見事に令嬢の誘拐事件の解決に寄与し、最後の場面では隣家の判事から生牡蠣をもらっています。そしてボズウェルはこんな看板を掲げます。

「ジョンソンとホッジ よろず探偵引き受けます
」・ボズウェル その用心棒」

そう、探偵として頭を使うのはあくまでもジョンソンとホッジで、ボズウェルは「その用心棒」なのです。この看板はもちろんデ・ラ・トーレの創作で、実在のボズウェルが掲げていたわけではないのですが、猫に負けているのに、麗々しくそれを看板に書くというのは、いかにもボズウェルがやりそうなことかもしれません。

ドイルが創造した探偵ホームズも、デ・ラ・トーレのミステリの中のジョンソンも、ロンドンの街で縦横無尽に活躍しています。19世紀末と18世紀という時代の違いはありますが、ホームズとワトソン、そしてジョンソンとボズウェルは、どちらもロンドンの雑踏と活気を愛し、そしてそこに巢食う悪と戦った、ロンドンという類まれな(ミステリ・ファンにとってはとてもとても特別な)都市が生んだ不滅のコンビなのです。

新しい訳書から筆名を仁木めぐみに変更いたしました。第三回以降もよろしく願いいたします。

リリアン・デ・ラ・トーレの作品リストを[翻訳通信のサイト](http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/my/dt/torre.html)に掲載しました。URLは以下の通りです。
<http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/my/dt/torre.html>

英語の記号

何でこんな簡単な規則を学校では教えないのだろう。知らなくても英文を読むことは読めるが、もどかしさが残るはずだ。正しく理解することで訳文に明晰さが生まれる記号のルールをいくつか挙げる。

(1)セミコロン；

- ・比較・対照・敷衍のしるし
- ・大きな and の代わり

(2)コロン：

- ・以下詳細のしるし

(3)カッコ (××) ダッシュ --××-- カンマ ,××

- ・いずれも挿入のしるしだが、長い挿入だとダッシュが使われることが多い

(4)ダッシュ - カンマ ,

- ・いずれも付加のしるしだが、ダッシュは列挙総括でも使われる

(5)ブラケット []

- ・引用文中に書き手が自分の説明を入れる。
- ・()内のカッコとしても使われる

(6)斜体

- ・作品のタイトル(日本語では『』とするのが正式)
- ・乗り物の愛称
- ・外国語系のことば
- ・強調・個人の意識・想像・思い起こした会話など

(7)ハイフン-

- ・複合語のしるし

(8)クォーテーション・マーク “ ” ‘ ’

- ・日本語の括弧「」『』の規則に対応して、米式で“ ” ‘ ’、英式で‘ ’ “ ”
- ・後ろのクォーテーションがないのは、話を端折ったしるし
- ・言葉の強調にも用いられる

(9)ドット ...

- ・引用の一部省略、発話の中止

(10)語頭の大文字

- ・固有名詞化

1、基本例

(1)セミコロン

比較・対照：I like swimming; my sister hates it. (流れ次第で and, but と読める)

敷衍：I don't want to go; besides, I'm too tired. (流れ次

第で so, for と読める)

大きな and：It is going to rain and snow; it is getting dark. (紛らわしさをさける)

(2)コロン

詳細：This is what you should do: go home right now.

(3)カッコ、ダッシュ、カンマ(前後)*意味は同じ

My mother (who rarely gets angry) really lost her temper.

My mother—who rarely gets angry—really lost her temper.

My mother, who rarely gets angry, really lost her temper.

(4)ダッシュ、カンマ(一つ)

He's very ignorant - or incredibly careless. (付言している)

(5)ブラケット

a bold undaunted [undaunted] countenance (誤字訂正している)

(6)イタリック

Hamlet Mayflower Fin de siecle (作品名/船名/フランス語)

You *did* it. (「やったんだろ」といった感じ)

(7)ハイフン

deep-rooted (深く根を張る：副詞 deep と過去分詞形の形容詞 rooted の結びつきを強める)

popularly-governed (= governed by many people. 大衆が統治する 民主国家、と読む)

(8)クォーテーションマーク

The witness said, "I was just opening the door, when I heard her scream, 'Drop that!'" (台詞と、その中の台詞)

"He's been working hard.

"Blumberger's been buying the bread here.

(後につづく言葉が省略されている)

What is the Japanese word for "etymology"?

(言葉の強調：etymology(語源)に相当する日本語はなんですか)

(9) ドット

Kennedy said, "And so, my fellow Americans ...ask what you can do for your country."

(10) 大文字

Several surviving English gardens from the 18th century illustrate this European tradition of Classical allusion and meaning.

(Classical の C の大文字が「古典古代の」の意味であることを念押し)

2、例文点検

(1) セミコロ

He reverences Jones because he takes 7 1/2; he dismisses Smith as of no account because he only takes 6 3/4.

* 態度の違いを前後で強く対比させている。of no account = unimportant

(この男は帽子のサイズが 7 1/2 あるからといって人を敬い、6 3/4 しかないからといって別の人を齒牙にもかけない)

Because the behaviour of others is similar to our own, we surmise that they are like us; it is a shock to discover that they are not.

* 思い込みとその結果を対比させている。our own = our own behaviour

(とる行動が似ているからその人が自分に似ているのではと推測するが、そうではないと分かりショックをうける)

(2) コロン

England was under the Roman for four centuries: and England is full of Roman remains.

* 後半は前半から導かれる細目

(イングランドは 4 世紀にわたりローマの支配をうけており、あちこちに当時の遺跡がみられる)

We take three courses: History, Biology, and Chemistry.

* コロン以下が内訳になっている

(三つ授業をとっていて、それは歴史、生物、科学です)

There was a time when we were not: this gives us no concern.

* 前半部を補足。were は存在を示す

(我々が存在しない時代もあったが、そう考えても別に悩みはしない)

(3) カッコ、ダッシュ、カンマ (前後)

Indeed, one of the ways in which Americans are able to distinguish Japanese tourists from other Asians (who all

look alike to the American eye) is that the Japanese are the ones who are always taking pictures.

* the ones = one of Asians。be taking に、いつも...ばかりして、の非難が感じられる

(実のところ、アメリカ人が日本人旅行者をほかのアジア人(アメリカ人には区別がつかない)と見分けるのに、いつでも写真を撮っていけばそうだ、というのがある)

(4) ダッシュ、カンマ (一つ)

How are those powers used—how is that estate employed?

* 例がひとつで足らず、さらにもうひとつ付け加えている

(そういった能力をどのように使うのか、その土地をどう活用するのか?)

Many a person spends a month's earnings in a fortnight at a south-coast resort, and envies the folks who can go abroad—when, for that same money, he or she might have been among the Alps, or at Venice.

* この when は同時性だがダッシュとともに、比較・対照を強めるもの (...なのに)

(南海岸の保養地などで十日ばかり過すのに月給分を使い果たし、外国旅行できるひとをうらやむ人も多い。それだけの金を使えばアルプスとかベネチアに行けたはずなのだが)

People collect postage stamps, coins, matchboxes, --in short, anything curious.

* ダッシュが列挙を総括している

(切手、コイン、マッチ箱といったちょっとかわったものを収集する)

(5) ブランケット

They [Marie Curie and her husband Pierre] extracted radium from pitchblende in 1898.

* They が誰であるのか念のために説明

(彼ら(キュリー夫妻)は 1898 年に瀝青ウラン鉱からラジウム元素を抽出した)

(6) イタリック

Imagine, for example, a *Romeo and Juliet* or a *King Lear* with a happy ending.

* 作品名

(例えばハッピーエンドの『ロミオとジュリエット』や『リア王』を想像してみよう)

'But you *must* have supper. I can easily do it here!'

* 食べなきゃだめ、という気持が斜体で表現されている

(「でもお食事はしなきゃ。すぐここでできるわ」)

(7) ハイフン

They have a horror of abstract thought, they feel no need for any philosophy or systematic 'world-view'.

- * 「世界の見方」といった意味を、結ぶつきを強くして「世界観」といった感じにしている。クオーテーションは「所謂」の意味
(彼らは抽象的な思考は毛嫌いするし、哲学的・体系的「世界観」の必要をつゆ感じない)

Mr Zuckermann himself, together with a group of public-spirited doctors, controlled the corporation.

- * これは上の例と逆に、「公共心」というものが怪しげである感じがハイフンにでている。
(ザッカーマン氏はボランティア精神のある医師のグループと、この会社を運営していた)

(8)クオーテーション・マーク

The American concept of the Japanese desire for a "free ride" has not been entirely off the mark.

- * 所謂、で揶揄・非難のニュアンスが感じられる
(日本には「ただ乗り願望」があるというアメリカ人の考え方はあながちのはづれというわけでもない)

"I do hope that we will not find a day in the United States when all of us are spectators except for a few who are out on the field."

- * 故・アメリカ大統領、ケネディのことば
(「この合衆国において、競技者以外国民がみな観戦者になってしまう日の来りませんことを切に望みます。」)

(9)ドット

'I know, Mr Lampson, I know ...'

- * あのことばは容易に想像されるので省いたか、話者が言いよどんだかどちらか。Mr にピリオドがないのは、固有名詞化を示す(例のランプソン氏)
(「あの、ランプソンさん、実はね...」)

(10)語頭の大文字

Forty years he had wielded the brush without getting near enough to touch the hem of his Mistress's robe.

- * mistress(婦人)の m を大文字にして、それとわかる対象(ここでは美の女神)に転化。
(この 40 年、彼は絵筆を振るいつづけてきたが、芸術の女神の裳裾に触れることかなわなかった)

3、演習

The primary channel of transmission of culture is the family; no man wholly escapes from the kind, or wholly surpasses the degree, of culture which he acquired from his early environment.

- * セミコロンが敷衍のしるし。No man wholly escapes = Any man does not wholly escape で、部分否定。of の前のカンマは掛かり方を明確にする読点の役割。
(文化を伝える最初の経路は家庭である。どんな人でも幼い頃の環境で得た文化の型をすっかりのがれたり、その程度を完全に越えることはない)

The principal reason why he was always being asked to umpire a game—aside from the fact that he never expected to be paid for his services, saying that he liked to umpire for the good of the game—was because he never failed to try to please both teams.

- * 挿入が長いとダッシュになることが多い。was always being asked と進行形なのは、筆者の何らかの感情(ここは呆れ・感慨など)が入っているため。expect は(よいこともわるいことも)「見込む」。fail to は(1)出来ない(2)しない、の二義あり、ここは(2)。

(彼がいつも試合の審判をたのまれる大きな理由は—お役に立つならお安いご用さと言って奉仕をいとわないこともあるが—どちらのチームも満足させそこなうことが決まっていたからだった)

The modern Englishman apparently has none: to go to the most ostentatious shop and there buy the most expensive thing is all that he can do.

- * apparently(1)外見上(2)明らかに、どちらもとれそう。
all that ~ ~ の最大限。

(現代の英国人は、この基準をいささかも持っていないようだ。それで一番派手な店に行き、そこで一番高価なものを買うのが関の山だ)

My view that there is no such thing as pornography—whatever dictionary definition you care to apply—only good writing and bad is borne out by no less an authority than Maurice Girodias, founder of Olympia Press.

- * 後のダッシュは挿入の終了部を示すと同時に、and の代わりも兼ねている。only good writing and bad (writing) は、no such thing as pornography と並列。no less A than B で、B が著名人・高位の官職などであるとき、「他ならぬ(Aである)B」。

(ポルノ文学(どんな辞書の定義を適用されようとも随意であるが)なるものは存在せず、ただうまい作品とへたな作品があるだけであるという私の持論は、オリンピアプレス社の創立者、モーリス・ジロディアスほどの権威者によって支持されている)

The important thing is that the feeling of the poet should be imparted to the reader; by his verbal creation the poet

should re-create in the reader a sharing of joy with his joy, hope with his hope, sorrow with his sorrow.

*セミコロンの前が原則、後がそれによって導かれる事象。このハイフンは同綴り・異義の単語と区別するためのもの。recreate(休養する) re-create(再創造する)
(重要なのは、詩人の気持が読者に分かち合われることである。詩人はことばによる創造によって、読者が詩人の喜びを自らの喜びとし、その希望を自らの希望に、その悲しみを自らの悲しみとするような一体感を生み出さねばならない)

In Shakespeare's *Hamlet*, Ofhilia, Polonius's daughter, falls in love with Hamlet.

*fall love with ~ の with は目的・対象を示すもので、「~とともに」ではない。
(シェークスピア作品『ハムレット』では、ポローニアスの娘、オフィーリアがハムレットに恋する)

When I returned to Japan, I increasingly realized a duality in my personality: when speaking Japanese, I was in fact in a Japanese conceptual framework; when speaking English, I

reverted to my Western persona.

*私の人格の二重性といって、コロンの以下詳細が示され、二つの when 以下が、比較・対照のセミコロンの結ばれる、まるで教科書にでも出てきそうな二つの記号の使い方。duality の一方は Japanese conceptual framework であり、もう一方は Western persona.

(日本に戻ってから、私は次第に自分の中にある二面性に気付いてきた。日本語を話すとき、私は実際に日本人の枠組みのなかにいるが、英語を話すときには西洋人のペルソナに戻っていたのだ)

‘So you see, on my machine, by having an adjustable coordinator between the “plot-memory” section and the “word-memory” section I am able to produce any type of story I desire simply by pressing the required button!’

*会話の中の強調要素を二重クォーテーションでくくっている

(「ですから、この機械では、「プロット記憶」部分と「単語記憶」部分を上手く調整することで、必要なボタンを押すだけで、お望みのどんなストーリーでも作れるんです。」)

アイディ『英文教室』受講生募集のお知らせ

柴田耕太郎

英文を正確に読み解く語学力と論理力があれば、翻訳は自ずと出来るものと私は確信しています。

学校教育の欠陥からか、この二つを備えた翻訳志望者はせいぜい20人に1人(アルク翻訳大賞の審査経験から)。私が主宰するこの教室では徹底した精読訓練を通じ、「一点の曇りなく読み解く」技術の習得を目指します。

翻訳家志望者、翻訳書編集者、語学教員、その他卓

抜な英文読解力をつけたい社会人の入門を期待します。

9月より定数集まり次第、開講。精読エッセイ100題、出版翻訳25題、読み解きポイント50など、各種講座あり。

なお希望者があれば「本当の声に出して読みたい日本語」講座も開きます(実は私の専門は演出論で、現在某大学で「シナリオ論」を教えています)

興味ある方は下記にお問い合わせ下さい。

株式会社アイディ
柴田耕太郎 主宰 『英文教室』
事務担当 前川
TEL : 03-3357-1189
FAX : 03-3357-4489
Email : educa@id-corp.co.jp
〒162-0054
新宿区河田町 7-6、ID河田町ビル